6.4 神の存在証明

6.4.1 アンセルムス（1033 - 1109）：神の存在証明

アンセルムスは,「神の存在証明」で有名なスコラ哲学の祖である.「神の存在証明」は次の通りらしいが, 日常言語の中の単なる言葉遊びに過ぎない. まじめに「証明」を読む必要はない.

証明 6.2. アンセルムスの「神の存在証明」

①: 神はそれ以上大きなものがないようなものとする.
②: 何かが人間の「知性の内」にあるだけではなく,「知性の外」にもある方がより大きいと言える.
③: もしもそのような存在が人間の「知性の内」にあるだけで, 実際に存在しないのであれば, それは「それ以上大きなものがない」という定義 ① に反する.
④: そこで, 神は「知性の内」にあるだけではなく, 実際に存在する.

(注) 本書的には,「神」とか「存在」が意味不明な言葉であって, (コギト命題とカントのアンチノミー同様に)「神の存在」は語り得ぬことである.

カントがこの証明の間違いを指摘したとどこかに書いてあったが, もしこれが本当ならばカントも大したことがない. 日常言語の中の単なる言葉あそびを真に受けて, 間違いなど指摘しても誰も褒めてくれない. 日常言語の中の論理が当てにならないことは,「ゼノンのパラドックス」や「アリストテレスの三段論法」で十分に喚起されたことのはずである.

6.4.2 世界記述主義を逸脱した神の存在証明

この「アンセルムスの証明」は, 次の世界記述主義に逸脱している.

(H): 世界記述主義 (*cf.* 1.3.1 節)

世界記述主義とは,

(H) 世界はこうである → 世界記述 (前提) —だから→ こうなる → 諸議論 (計算・論理等)・諸性質 (各論 (*or* 本論))

すなわち,「世界記述から始めよ」という精神である.

何度も述べているように,

(B) 世界記述法（たとえば, 数学[*2], ニュートン力学, 相対性理論, 量子言語等）を決めてから, その言語体系の中でゼノンのパラドックスや三段論法（証明）を議論しなければならない.

そうならば,「神の存在証明」もそうでなければならないだろう． もちろん,

- 「神」は一番偉いから,「世界記述法」とか「論理」を超越している

とか

- キリスト教徒ならば,「世界記述=聖書」なのだから, 聖書に書いてあることを信じなさい

と言われれば, 反論できないが, そうならば,「アンセルムスの証明」も必要ない.

6.4.3 アリストテレス哲学の流入

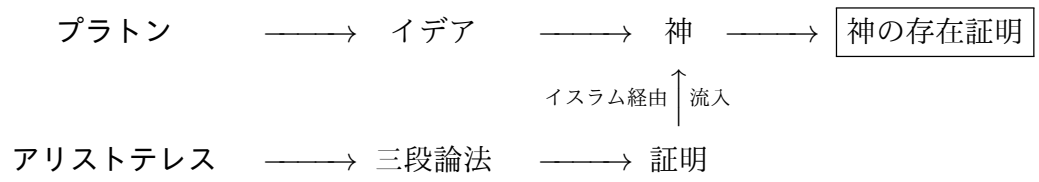
したがって,「アンセルムスの論法」は妙な論法であるが, 結局,

(C) アンセルムスが「イスラム経由でアリストテレス哲学が流入して, その影響を受けました」とか,

「アリストテレスにカブレました」

と言っている

だけのことだと思う．つまり， 次の連想ゲームを考えれば,「神の存在証明」という言葉にたどり着く：



すなわち, アリストテレスの三段論法を勉強した神父が, 三段論法を使って,「神の存在証明」をした気分になったということで,「神の存在証明」はスコラ哲学 (プラトンとアリストテレスの融合・折衷案という無謀な試み) の産物であることがわかる.

キリストの「聖書」よりもアリストテレスの「三段論法」を選ぶとしたら,

(D) アウグスティヌス作のプラトン神話「神の知性=イデア」の賞味期限が切れて, アリスト

[*2] 本書では, 数学を世界記述の一種とは考えないが, 数学は最も確固たる言語体系を形成する.

テレスの影響力が増大してきた

ということである.

6.4.4 大袈裟に言うならば

アンセルムスを祖とするスコラ哲学とは, 大袈裟に言うならば,

(E)「信仰」だけでなくて,「思考」も可とする

というキリスト教内の革命である. もちろん, 思考のテーマは限定されるとしても,「神の存在証明」なら文句はないだろうというわけである.

アンセルムスが名声を獲得した理由は, 上の（E）, すなわち,

(F)「思考停止」のマインドコントロールから解放されるためのマジックワード「神の存在証明」の発見

である.
結局,

(G) 信仰だけの盲目状態から, アリストテレス流の「現実を見る目」が徐々に熟成された歴史がスコラ哲学で, そのバトンをデカルトが受け取って, 近代の幕が開かれた.

だろう.
それにしても,

- **欧州では何度も大哲学者が「神の存在証明」に挑戦するが, その意義・動機は, 日本人には到底理解できないことなのだろう. いくら立派なことを言っていても, 最後に「神の存在も証明した」と言われるとガッカリしてしまうのは, 日本人だからだろうか？**

アンセルムスの「神の存在証明」は, 中世以降の哲学者たち（デカルト, カント等の大物）に大きな影響を与えたと言われているらしい. 多分, 本当だろう. デカルトは「我思う...」から「神の存在」を演繹してしまったし, カントも神に無駄な時間を費やしてしまった. プリンキピア執筆以降にニュートンが錬金術に没頭したように,「中世を引きずりながら現代」へ徐々に発展したのだと思う.

♠ **注釈 6.8.** 神に無関心な理系はいないと思う.「神とは何か？ (=信仰の脳回路は如何?)」とか「主観的時間とは何か？ (=脳内時計は如何?)」は脳科学の主要テーマの一つである.